シモマッチの校長随想

～教育は過去からの贈り物、そして未来へのメッセージ～

下町壽男　盛岡中央高校附属中学校副校長

第16回

「発信」が前後の行動を決定する

昔の話になりますが、教え子のMさんが、フラメンコギターの発表をしたときのことをフェイスブックに書いていました。「ギターもダンスも出来は良くなかったけど、一人反省会をし、引き続き練習です。やっぱり基礎大事」

私はこの記事を読んでなるほどと膝を打ちました。基礎の大切さを述べているわけですが、皆さんはこの記事からどんなことを感じますか。「やっぱり発表する前に、まずは基礎だよね」でしょうか。

私は違います。この記事の肝は、「発表」することによって「やはり基礎が大事」と気づくことなんだと思います。

□ アウトプットなしでは欠乏に気づけない

アクティブ・ラーニングを進めていく中でよく出会う質問は「本校の生徒はまだアクティブ・ラーニングができる段階ではない。まずは基礎・基本」「基礎・基本を習熟した先でなければ充実したグループワークや表現活動なんかできっこない」というものです。

そして、繰り広げられるのは、「板書をノートにとる」「私語をしない」「課題を提出する」ということに心血を注ぐ授業です。でも、そうやって培った?基礎・基本を表現するチャンスは、最後までやってくることはありません。そんな授業を行う教師はこう言うかもしれません。「高校での授業は、大学や社会にでるための準備である。だからつらくても基礎をしっかり身につけるべきである。今はその時期」だと。

もちろん、基礎学力が乏しければ、対話の内容が薄っぺらになるということはありうることでしょう。ならば、そのことを気づかせるためには、表現する場を与えることが必要ではないかと私は思うのです。

つまり、アウトプットによって、インプットの欠乏に気づき、自ら考え、学びだすということです。確かに、基礎・基本の習熟に個人差はあるでしょう。でも、自らの欠乏に気づく力は誰もが一様に持っていると私は思いたいのです。

私もギターが趣味なのですが、最近、様

々な場で演奏をさせていただく機会に恵まれています。全くヘタの横好き、「寝床」の世界なのですが、でも発表の機会が与えられるからこそ、次はどんな曲を演奏しようかとか考え、練習にも力が入ります。

そして実際に発表すると、たいがい失敗し、恥をかいたりするわけですが、でも思いっきり楽しんで演奏することで、充実感を抱くとともに、周囲への感謝の思いや、ありのままの自分を受け入れる気持ちも生まれます。そして、ああもっと練習すればよかったと振り返り、高みを目指そうという思いに拍車がかかり基礎練習の大切さに心が向かうのです。

イラストも筆者

幸せ研究の第一人者である、慶応大学の前野隆司先生は、「やってやろう」「なんとかなる」「ありがとう」「ありのままに」を幸せの4因子と定義されていますが、まさにこの気持ちが自分の中で増幅しているように思います。

「遊び」的学習の大切さ

思うに、ディスカッションやプレゼンテーションなどの発表・発信の活動は、「何をするか」だけではなく、その前後で「どのように行動するか」を決定づけるものではないかと私は考えます。だから特に教育現場においては、発表自体のクオリティが高いか低いかをうんぬんするより、むしろそれによって、内発的な動機が生まれ、個の学びに返されていくことにこそ注目していくべきではないでしょうか。

ディスカッションやプレゼンテーションなどを中心とした授業は、時に非効率で冗長で、失敗を生み、最適最短な学びにつながらないかもしれません。でも一方で、これは、子どもが「遊び」に熱中し、楽しさに浸りながら多くを獲得していくことに似ています。

人は「はしゃいで飛び回る」ことに時間を費やすことによって学習し、未知の世界に踏み出す勇気を獲得するといわれます。このような「遊び」的学習は、生涯にわたって学び続けるための大切な要素の一つではないかと私は思います。

さて、私はここまで書きながら、自分の基礎力不足に気づきました。私のいいたいことを述べるために、今読んでいるガート・ビースタの『よい教育とは何か』を読み終えてから書くべきだったとも思いました。ああ、今すぐこの記事を書くのをやめて、本を読みてぇ。心底そう思いました。私の頭の中にあるけれどまとめ切れていないものが、きっと本に出会えば見つかるはずだ、と。でも、こうやってパソコンに向かってあれこれ考え、文章として表現し、原稿に仕上げ、発信することは、価値ある時間であるとも感じます。